（2009年12月２日発行）

W.A.Mozart Hiroba

「モォツァルト広場」 SINCE 1995

第23号

Ｓ君への　お別れのことば

……聴いて欲しいモーツァルト　その20

会員番号　K618　加　藤　　明

還暦を迎えたこの夏、生まれて初めての体験である《弔辞》を述べました。

しかも、高校時代から今日まで40年を超える付き合いのあった親友に贈る弔辞です。

この忽然と亡くなった親友の奥さんが「モォツァルト広場」の会員ということもあり、「広場」への関わりの少なくない大切な支援者でもありました。

彼は筆者が「どうしてモーツァルトにこころ奪われたか」について、純粋に人としての視点で強い関心を寄せておりました。

きっと、筆者のモーツァルトへのこだわり方が彼の想像を超えていたからだと思います。

そんな心友に伝えた惜別のことばをあらためて記述し、故人を偲ぶことにしました。

生きてあるということは「逝ってしまう人を見送ることなんだなあ」、という感慨と、今はただ彼の地でモーツァルトを愛でながら安らかに、と冥福を祈るしかない思いです。

悼　　詞

『天空のみなが憧れる彼の地、あの善き魂の住むところに飛翔した我が友　Ｓ・Ｓ君にいま、なによりも感謝の気持ちを伝えるべく私はここに立っております。

このお別れのことばはきみの生前からの私へのご下命、つまり遺言により、引き受けているものです。

ですから、飽くまでもこれはきみとの約束の実行であります。

それは、きみと私で交わした、「走れメロス」の気高い友情を想わせ、青春の匂いを放つ約束でした。

ただ、残念ながら「走れメロス」のように、友として殴りあうことはかないませんが、どうにかして、きみとの約束を果たしたいという一念でいっぱいです。

◆　　◆

平成21年、今年の正月４日、我らが母校Ｓ高昭和43年卒業の同期会で発起人代表のきみは90名の仲間を前に、還暦のお祝いを兼ねた代表挨拶を温かくて味わい深い言葉で、しかも感動的な韻律を醸しながら語ってくれました。

この還暦同期会は準備に半年を要した大きなイベントでしたが、きみは退院後の体調不良を感じさせない気丈な姿勢を貫き、リーダーの重責を完遂してくれたものです。

振り返れば、「団塊の世代」よろしく、我われは戦後世代の大きなかたまりを形成する集団として、この国の再興のイデオロギーに組み敷かれ、激しい競争社会の只中に放りこまれるなかにあって、古い学び舎を共にした輝ける仲間

たちでした。

その親たちはといえば、多くは大正生まれであり、従って戦争体験者であり引き揚げ者も多かったのですが、彼らは昭和の戦後復興とともにこの国の初期の成長期を担う中心的な世代となり、その成長過程での落とし子が正に団塊世代、つまりきみと私でした。

この戦前・戦後の精神分裂を起こした日本にあって、我われの親たちの戦後を生き抜くための艱難辛苦には何人も疑いを入れません。

きみの父上も私の親も同じ引き揚げ者でありましたし、どうにかして故郷に居をかまえ、克己心に燃え、営々とまっしぐらに自分のため、家族のために働き続けてきたのでした。

人一倍聡明にして頑固、表面上の厳しさとは裏腹にヒトには気遣いのあるやさしい父上の薫陶の下で、きみは高校卒業まで秋田で育てられたのです。

きみの性格の一端、激しさと優しさは正にこのようなお父様から受け継いだものでした。そして、モノゴトに対する一途さは受け継がれた性格の最たるものでありましょう。

きみよ、この何かにつけての一途さが最後の最後まで「きみらしさ」の象徴であった、と評したら、きみは苦笑いしつつも納得するでしょうか。

きみは不幸にも重い病いをはらみ、３年に及ぶ闘病生活を強いられましたが、退院後の凄さまじいほどの公私にわたる活躍ぶりはその一途さが原動力となっていたように思われてなりません。

時代は遡りますが、きみと私が高校卒業後再会したのは昭和49年ころ、きみが大学を卒業し、東京での修行経験を終えて帰郷して間もないころでした。

偶然、広小路のど真ん中で鉢合せたのです。

その時のきみはなにか自信がなさそうでやわな印象でしたが、持ち前の率直な意思表明は健

初めての乳頭

在で、嬉しかった記憶があります。

当時、私は地元で喫茶店とレストランを営む会社に勤めており、「これから外食がどんどん伸びる。食器も需要が増えるぞ」と、明るい未来の話を一方的にしたようです。

その後の展望に目覚めたのかどうかは別として、それからというもの、きみはＳ商事の専務として頻繁にレストランに顔を出すようになりました。

それは、きみと私の30年を超えるビジネスマンとしてのお付き合いの始まりでもありました。

再会して７年ほど経過した昭和56年の夏、私は故あってそれまでの喫茶店・レストランの会社を退職することになりました。

そのときのエピソードをとうに時効でしょうからお話しましょう。

きみよ、想い起してください。

私はその会社の退職に際して、方々に再就職の可能性を探っておりました。

S君と夢みた鳥海山

そんな折に、事もあろうに、私はS商事で雇ってもらえないだろうか？ときみに図々しくも打診したのです。

きみはかなり真剣に私のことを考えてくれておりました。

しかし、なかなか返事がきませんでした。

ついにしびれを切らしたせっかちな私が、「S、例の就職の件はどうなった？」と詰問したのです。

そのときのきみの私への返答を憶えているだろうか。

きみは口ごもった様子で「かみさんに相談したら、《加藤さんが来たら、あなたは何をするの？》と訊かれ、正直困っている…」という返事だったのです。

そこで、社会性に富んだ（！）私は、「ああそうか、それなら無理はしないほうがいい」と大人しく引き下がった、という経緯です。

その後、私は現在勤務している会社に縁あってひろってもらい、今のいままできみとは公私の関わりをそれまで以上に深く保つことができるようになったのでした。

きみよ、この話にあるように、きみの最愛の奥さんＹ子さんは多くのヒトが知る大変しっかりした賢婦人であり、きみはその点だけをとっても恵みのある人生を送った、というべきでしょう。

すでに証明ずみですが、きみのこの間の病気療養中の会社経営の切り盛りぶりは、失礼ながらきみの不在を埋めてあまりあるように見受けられもしました。加えて、二人のお嬢さんの健やかで地に着いた成長ぶりをみるにつけ、何かにつけて心配したくなる私の思いなど杞憂にすぎなかったんだなあ、と恥じ入る昨今なのです。

これも、きみの家族愛と経営意志がしっかりしていたことに負うのでしょうが、それにしても、なんと健気で凛とした精神でありましょう。

◆　　◆

Ｓ君、今となってはきみと初めてで最後となってしまった乳頭登山のとき、きみがあんなに好い顔をこしらえて、晴れ晴れと友情を確かめられたことを忘れてはいないでしょう。

残雪の５月の乳頭はとても感動的な自然の装いで、観たこともない一面が白銀のジュータン

鳥海山のニッコウキスゲ

を装おって、きみと私を迎えてくれました。

頂上でのＹ子さんのつくったお握り、美味しかったなあ。

山を降りる途中、道しるべを見失い一時遭難状態となったアクシデントも二人の懐かしい思い出です。

下山後は田沢湖を見下ろす温泉に二人で浸かり、山のこと、同級生のこと、やっぱり仕事のことなど心ゆくまで語り合ったものでした。

つい二週間前、それが最後のきみとの対話となったのですが、やはり体調のことや仕事のこと、商店会のことなどひとしきり話をしたあと、わたしが「Ｓ、今年中に鳥海さ行けるかなあ、紅葉、紅葉」とつい漏らしました。

そしたら、きみは突然目頭を真っ赤にして「行く！おれ鳥海さ行きてぇなあ」と興奮ぎみに語気を強めて返してきました。

「焦らなくとも、Ｓ、山は動かないから、しっかり良くなってからいくべ…」。

わたしは一瞬きみのみなぎる気魄に圧倒され、たじろぐ自分を感じました。

Ｓ・Ｓ君、きみにはほんとにいい付き合いをさせてもらった、とお礼をいいます。

きみとの40年という永い交流は時として時節のさまざまな批判であったり、モノゴトの評価であったり、仕事のことであったり、子供のことであったり、と様々でしたが、ただひとつ文学や音楽、芸術の話はほとんどしなかった、というのが心残りといえば心残りでおります。

お互いお酒も強くなく、夜の付き合いが少なかったせいかもしれませんが、追っ付け、私もそばに行きますから、そしたらまた、乳頭のときのように楽しく語らいたいと念じております。

そのときはまだ聴いてなかった、きみが陶冶した食器に関する蘊蓄もちゃんと正座して聴かせてもらいたいと思っています。

みなが憧れる彼の地、あの善き魂の住むところで、どうか疲れたからだを癒し、ブランデー片手に温泉に浸かりながら、モーツァルトのピアノ・ソナタでも聴いていてください。

ひとまず、約束どおり、きみにお別れのことばを贈ります。

永い間、ほんとにありがとう、さようなら。』

《推薦曲と推薦盤》

今回のテーマに添って考えていたら、モーツァルトが慈善団体（フリーメイソン）の一員として活動するなかで作られた曲が浮かんできました。

熱心なフリーメイソンとしても有名なモーツァルトですが、団体の理想を鼓舞したり、同志のためにたくさんの曲を作っています。

その中から、「フリーメイソンのための葬送音楽」Ｋ４７７を推薦します。

モーツァルトならではの静謐感と敬虔な友への心情が表出された傑作として名高い曲。

興味のおありの方は是非ワルター指揮・コロンビア響でお聴きください。

なお、フリーメイソンにまつわるディスクではケルテス指揮やペーター・マーク指揮の名盤があります。

モーツァルトを聴くのは人間だけじゃなく…

会員番号　KV413　**吉　谷　美十里**

先日大学時代に仲良くしていた友人から「モーツァルトが醸した醤油」の話を聞きました。京都府亀岡市の丸岡醤油という会社が製造している生醤油で、酵母菌がたくさん生きていて健康にもとてもいいお醤油との事です。

「モーツァルトを聴かせて育てた・作った○○」というフレーズはここ何年かいろいろと耳にするようになりましたが、特に食べ物関連でトマトやバナナ（甘みが増す）・ワイン（酵母が活発になる）・乳牛（お乳の出が良くなる）に取り入れられているという知識くらいしかなかったのが私の正直なところです。初めてこういった商品を体験する事ができたのがちょうど１年前の昨年のモォツァルト広場アニバーサリーパーティーで、ドリンクで提供された日本酒「蔵粋（くらっしっく）」でした。この日本酒は福島県喜多方の小原酒造という酒蔵で製造しているものですが、普段日本酒を飲まない私にとっては「酵母にモーツァルトを聴かせることによって…」などという事は良くわからないにしても、とてもフルーティーですっきりした口当たりが親しみやすいお酒でした。この日の事を自分のブログに書いたところ学生時代の友人が興味を持ち、その結果お醤油を見つけて買ってみた…といった感じです。

この「音楽熟成」という方法。私の浅い知識の中では何かの根拠に基づくよりも、その物珍しさや特別感の付加価値の方が興味をそそりますがそれも話題性。秋田にも「モーツァルトを毎日聴かせて育てた比内地鶏や牛乳」があるそうで、それなら是非１度はお目にかかり食してみたいものです。

か弱きクラヴィコード

会員番号　K10　**畠　山　久　雄**

テノール独唱とフルート演奏を聴く機会があった。それぞれに清潔で、丁寧で、美しく、心暖まる素晴らしい演奏だったが、もう少し声量・音量があれば説得力があったであろうと感じたのは、私だけではないようだ。

数日後、私の勤務先向かいの八橋運動公園で野外ライブが開催され、大音量で盛り上がっていた。その音は風に乗って職場にも届くが、ん〜！ヴォーカルの音程はかなり怪しい。しかし、大音量で聞かされているお客様は気付いていただろうか？気付く必要もなく楽しめればそれで良いのであり、私がとやかく言う必要はないことだ。

お気づきのように、聴衆にとって音量は大事な要素であり、とてもすばらしい演奏でも音量が小さいと説得力に劣り、その反対の演奏であっても音量が大きければ許されてしまう傾向にある。

表題に話を転じ、耳慣れないクラヴィコードだが、14世紀頃に発明され、机の上でも演奏可能な鍵盤楽器で、強弱やタッチヴィヴラートも自由自在という優れものの楽器です。昔は家庭用の楽器として多くの音楽家に愛用され、旅先にあったモォツァルトや大バッハの息子C.P.E.バッハなども、時にクラヴィコードを弾いていたようである。※ "Clavier"は、ラテン語で「鍵盤楽器」を意味する。

この優れもののクラヴィコードが絶滅しかけた原因は、音量が小さいということに尽きるのではないか。どのくらい小さな音かというと、小型のノートパソコンより小さい音である。大分以前に触ったことがあるが、か弱い音で一般家庭で深夜に窓を開けて演奏しても決して苦情は来ないであろう。この楽器については久元祐子さんのホームページに詳しく記されているのでご覧になってください。

（Mozart→「モーツァルトと楽器」）

その後、弦をはじくスタイルのスピネット、ヴァージナル、そしてチェンバロと徐々に大きな音が出る楽器が作られるようになったが、そのチェンバロもハンマークラヴィーア、ピアノの発達と共に人気が衰えていったのである。音楽において音量が大きな要素であることは疑う余地がないが、音量だけの問題ではないことも御賢察の通りです。

一方、当時は教会のパイプオルガンが充分な迫力で民衆の心を捉えたようだし、屋外で演奏されるブラスバンドも充分な迫力である。また、室内で演奏される多くの楽器も音量を求めて、様々な改良が施されたことはよく知られている。

ところで、時は現代、大人数に音声情報を伝達する※ＰＡ、いわゆる拡声装置は、今や現代生活に欠かせない存在となっている。野外ライブ、各種イベント、コンサートなどもＰＡなしでは開催できないし、ＴＶはもちろん、横断歩道など私達はあらゆる拡声装置に取り囲まれて暮らしている。

余談になるが、ＰＡが発達するきっかけとなったのは、ヒットラーがプロパガンダを行う際に拡声装置を重要視したことからと言われています。　※ＰＡ＝Public Address

さて、どんなに贅を尽くしたＰＡであっても原音を忠実に再生することは困難である。クラシック音楽では目の前に演奏者がいて充分な生音を出しているのに、わざわざマイク・アンプ・スピーカーを通して音を変える必要はない。屋外とか結婚式など特殊な事情以外では、ＰＡを

使用することは、演奏者にも聴く人にも失礼なことと思います。

しかし、クラヴィコードはモォツァルト広場で空調も止めて、皆が息を殺して聴いても後ろの席まで聞こえるかどうかの音量である。したがって、この楽器だけは例外的にＰＡを認めて良いと思います。もちろん、モォツァルト広場に運んでくれば見て、触って、聴いて、感じることが出来る。その機会が来ることを願って筆を置くことにします。

以下に久元祐子さんのＨＰから引用させていただきます。

〜私は山野辺暁彦さん制作のクラヴィコードを手元に置き、毎日弾いています。ご覧いただければおわかりのとおり、箱形のとても小さな楽器で、持ち運びすることもできます。自分でコンサート会場に運んで、また持って帰ってくる、というのはなかなかの重労働なのですが、地下鉄や電車で運ぶことができる鍵盤楽器は、このクラヴィコードくらいではないでしょうか。

かさだけではなく音も小さく、ちょっとした空調の音でもこの楽器を弾くには、大きな騒音になってしまいます。耳を澄ます、という能動的な働きかけによって、この楽器の醸し出す豊穣さを享受する歓びが生まれる、ということかもしれません。しみじみと自らと対話するように弾く、ある意味でパーソナルな鍵盤楽器と言えるでしょう。〜

クラヴィコード：幅90〜180㎝、奥行き30〜60㎝、高さ10〜20㎝の長方体で、４本の脚がついているものと卓上型とがある。脚を除いた重量は９〜18㎏
※　写真は廉価版卓上型、久元さんのクラヴィコードではありません。

参考
クラヴィネット：クラヴィコードもどきに、エレキギターなどで用いる電気ピックアップを装着し、ボリュームやトーンコントロールアンプを有したものであるが、メカニズムはクラヴィコードよりさらに簡略され、タッチヴィヴラートは出来ない。ロックなどにも使用され、本質的にクラヴィコードとは違う電子楽器と考えた方がよさそうです。
クラビノーバ：ヤマハ商品名、本物のピアノに近いという電子ピアノです。
クラヴサン　（仏）＝ハープシコード（英）＝チェンバロ（伊・独）

欧州での「音楽鑑賞」二題

会員番号　K306　**北　條　　晃**

私は3年前に入会した「オールド・ニューフェイス？」である。もとより、モーツァルトの蘊蓄を語ることは至難の業。拙文啓上で御容赦願いたい。

1．パッサウ（ドイツ）にて

この10月、パッサウ、秋田両市の姉妹都市提携25周年記念式典に妻と共に参列する機会を得た。穂積志・秋田市長一行、秋田市日独協会グループ、旅行社による私どものツアーなどが、異なる日程の中で二日間だけパッサウ市で落ち合った混成旅団と相成った。ジョイントした秋田市民は80名程か。

パッサウの市庁舎大ホールで開催された式典には独側も含めて数百名が出席。セレモニー、晩餐会、音楽演奏会が混然となった記念祭では、パッサウ市長の祝辞、穂積市長の式辞を挟んで独ハノーファ音楽演劇大学に留学中の秋田市出身・佐藤卓史さんのピアノ演奏（シューベルト、シューマン等）が披露された。

次に登壇したのは、日独協会副会長・松田至弘氏（**写真**）。申すまでもなく松田氏は「モォツァルト広場」の重鎮（会員番号K203）だが、協会を代表しての挨拶を述べられる。

地元演奏者によるピアノ、サックスフォーン、メゾソプラノ歌手のオペレッタの熱演もあり、ワインを重ねる程にパッサウの夜が更け行くのであった。

松田氏のあいさつ

二日目は世界最大級のパイプオルガンで広く知られている聖シュテファン大聖堂を訪れ、その演奏に耳を傾ける。残念ながら両日ともモーツァルトの演奏はなかった（松田氏にも確認）。

その夜のパッサウ市独日協会側の心暖まる歓迎レセプション（某侯爵の館）を胸に、ツアーはプラハ（チェコ）、マンセン、ドレスデンを巡り、本年11月9日に東西冷戦時の「ベルリンの壁」崩壊20周年を迎えるベルリンをラストに帰途に就いた。

蛇足だが、パッサウでの出合いから9日目、私たちを追いかけるように帰国した佐藤卓史さんのリサイタル（10月23日・アトリオン）にも歩を運ぶ二人なのであった。因みに佐藤卓史さんは、私の出身中学の49年後輩（それ程、筆者は年寄りデス）である。

2．ウィーン（オーストリア）にて

本会報の建前上、モーツァルトに触れねばなるまい。話はチト古いが、3年前の2006年は、モーツァルト生誕250年、わが日本列島も巻き込んで演奏会が目白押しにあった。生誕地オーストリアへの日本人旅行客は、その前年比3倍増であったとか。かくいう私たちもウィーンに旅する二人になる。

さすがは音楽の都。ゴシック様式のウィーン市庁舎地下のレストランでは、ランチタイムにハープが奏でられていた。

お目当ては、「ウィーン・モーツァルト・オーケストラ」による楽友協会ホールでの「モーツァルトの調べ」。楽団員は彼の時代の扮装、ヘアスタイルで登場する。シートは何んと最前先のかぶりつき（旅行社の割り付け・前過ギマシタ）。

パッサウ市民の夫婦と筆者

触(さわ)りではあるが「フィガロの結婚」、「ドン・ジョバンニ」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「魔笛」などのオペラ曲が男女主演歌手の掛け合いで演じられる。間には、「アイネ・クライネ…」、交響曲第40番も。キラ星のような全9曲に喝采、また喝采である。今も当日のプログラムは、後生大事に保持しているのだ。

宿泊ホテルはリンク通りにあって、オペラ座、王宮なども歩いて行ける最高のロケーション。フリータイムは早朝の王宮庭園へ。モーツァルト像の周辺を散策する。さらにはケルントナー通り（歩行者道路）からシュテファン寺院近くの改修間もない「モーツァルトハウス」も探訪、自筆の手紙や楽譜などを目にする。オペラ座での公演は叶わなかったが、館内のショップでモーツァルトグッズを購入した。

このツアーでは、プラハ、ブタペスト、プラチスラバ等も歴訪したが、中世の古き、良きヨーロッパの佇まい、面影を残した街並み、美術・アートに陶酔した。栄華と動乱、合従連衡を刻んで来た中欧の歴史を改めてお浚(さら)いしたものだった。「モォツァルト広場」に入会したのは、余韻醒め遺らない、この年の秋なのである。

酒とモツの日々（23）

会員番号　K488　**佐　藤　　滋**

年末になりましたね。昨年暮れから始まった雇用不安、そして派遣村の厳しさ…今年も繰り返されるのでしょうか。（およそモオツアルト広場にふさわしくない話題ですが）

解雇の問題といえば230年前のモーツァルトも、ザルツブルグ宮廷での雇用に関して悪名高いコロレド大司教との確執の最中にありました。モーツァルト伝記では悪の権化みたいなコロレドですが、最近は再評価の動きもあるようです。彼は贅沢を好まない知識人として不要不急な出費を抑える努力をしたのですが、その一環として典礼音楽を45分以内にする、等の節約策をたてました。

我らがモーツァルトにはそれが面白くなく（まあ大局が見えていないということです）また待遇への不満があり（それでも当時としては相応の金額で、しかも年俸ですから正規雇用です。伝記にあるようなひどい扱いなら日払いでもおかしくない）おまけに自己都合で退職し、さんざん求職活動をしたあげく母を失い、夢破れて帰省しました。天才としてのプライドが、愚かな行動を促したのでしょうが、父親の取りなしで渋々再雇用を求めます。コロレドの偉いところは、願いを受け入れ、従来の3倍の年俸（450グルデン）まで約束してくれたことです。それなのに…。

コロレドは、パトロンとしては失格ですが、オペラ劇場もない田舎町ザルツブルグの統治者

としては賢明な仕事ぶりだったのです。後日、雇用主とケンカして解雇されたのはモーツァルトの世間知らずが引き起こした自業自得の顛末といえるでしょう。

今は違います。恐ろしい法律によって、何の落ち度もない人が合法的に解雇されてしまうのです。この厳しい時代のなかでアルコール依存症が増えているという報道がありました。本来、楽しく飲むべき百薬の長が、悩みや、やり場のない怒りのはけ口として利用されていることは悲しい現実です。お酒に逃げ込む前に、どうか視線を別のところに向けて見てください。自分よりも困難な状況のなかで必死に努力している人々のことを想ってみましょう。私たちは社会的動物です。自分だけが苦しいのではない…という思いや考え方こそがお酒よりも、悩みや怒りを和らげる妙薬として効くはずです。

うぬぼれ屋で、わがままなモーツァルト。でも彼の本当に偉いところは、どんなに厳しい環境にあっても生きる楽しさを追い求めたこと、人生を楽しもうと諦めなかったこと、そして最後まで明るい音楽を生み出したことです。

私たちも明日はどうなるかわかりません。でもモーツァルトのように前向きに生きてゆきましょう。何も生み出せなくても、モーツァルトの音楽を身近に感じて行きましょう。モーツァルトから元気をもらいましょう。（ケンカしてはいけませんよ）

そしてやっぱりお酒はおいしくいただきましょう！

事務局より

■2009年も早いものでもう終わりを迎えております。今年は特に例年にない１年間だったのではないかと思いますがいかがでしょうか。長年続いた自民党政権が退陣し民主党政権が新しくスタートをしました。また、新型のインフルエンザが流行るなどこれまでに経験したことないことが多くありました。そんな私も先月流行にあわせて新型のインフルエンザと診断され、しばらくタミフル頼みでの戦いを続けておりました。

まだまだ寒い日は続きます。どうぞ会員の皆さまもインフルエンザ等には十分にお気をつけくださいますように。　（K575）

■またしても「生老病死」避けられざる四つの苦しみ、を思う。

能代の柳谷尭さん（K588）が天空に召された。

年二回の「広場」のイベントには奥様と欠かすことなく来られる熱烈なモーツァルティアンで、サマーコンサートではいつも最前列に陣取り、繊細なモーツァルトの音色を心底楽しんでいらした姿が焼き付いている。

今後は、奥様が継承されて、「コシ・ファン・トゥッテ」はますます輝きを放つ。

合掌。

（K618）

モォツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H21年11月現在116名）
入会金：￥2,000　年会費：￥3,000（諸会費、別途）
お問い合わせ・・・イヤタカ内
加藤 携帯電話 090（7939）4058 又は 本田（事務局）080（1673）8322